

紹介

朝鮮史入門

朝鮮史への関心が多くの人々から向けられはじめたのは最近のことである。特に一九六五、六年にかけて、いわゆる日韓条約締結の問題が大きな政治問題として世論を二分した中で、日本人の伝統的な朝鮮観への反省をふまえて朝鮮史の正しい理解は何か、朝鮮史研究の正しい視点と現代的課題は何か、が広く論じはじめられた。

本書はこのような問題意識と反省を、いわば日本人研究者として最も早くから持ち続けて来た朝鮮史研究会（一九五九年結成）に結集する人々によって執筆されたものである。朝鮮における旧石器時代文化から朝鮮戦後の現代までを一三篇にわかれ、それぞれ分担執筆されており、また最初に総論として旗田巍「朝鮮史研究の課題」が含まれている。

この総論部分はいわば日本人のこれまでの朝鮮史研究への思想的反省ともいえるべきもので、戦前・戦後の研究の中にあつた、

朝鮮史の主体性を否認し、「他律性史観」と「後進性」「停滞性」史観による朝鮮史理解への反省、批判が行なわれている。と同時になおこのような古い朝鮮史像を打破するために努力している人々のいることも紹介しつつ、なおそれがまだ新しい朝鮮史像を提示するまでに至っていないことも指摘している。

一三篇の各時代別、問題別のものについては、こゝで紹介する余裕はないので次に目次のみを列挙して紹介にかえさせていた

「考古学からみた朝鮮」「古朝鮮・辰国・任那・三国」「奴婢制と封建制」「土地所有関係——公田論批判」「国家機構と社会形態」「政治過程——新羅・高麗・李朝」「対外関係——外庄と抵抗」「近代朝鮮への思想変革——実学と開化思想」「資本主義萌芽の問題と封建末期の農民闘争」「開国と植民地化の過程」「日本帝国主義の朝鮮支配」「近代における民族開放闘争」「解放後の朝鮮」

以上の目次からも明らかなおり、ほぼ朝鮮全史にわたり、しかも総論において反

省されている如く、朝鮮史の自立的発展を中心に明らかにしていこうという意図によって、従来の研究史が概括されている。さらに最近の朝鮮における研究にも充分注意が払われている点が本書の重要な点であろう。もっとも、これらの意図がすべての論文に充分にたつらぬかれていたとはいえないが、ともかく現在まで何一つ類書がなく、およそ独立した一外国史としてまとめられていなかった朝鮮史についてこのようないわば研究入門が公刊された意義は大きい。そして各論の間にある見方の相違や研究史総括の視点の相違はとりもなおさず現在の朝鮮史学界の状況の反映だと言ふほかない。とすれば本書の公刊は成果は勿論不十分な点もふくめて、真に科学的な朝鮮の歴史を日本人として、その責任において築き上げようとする者の出発点ともなるべきものであろう。執筆者の方々に敬意を表するとともに今後研究を進めようとする我々に責任の重大さを感じさせるものである。

(B6判函入 三七〇頁 一九六六年一月
太平出版社発行 定価七五〇円) (井口和起)